

幼児の発達と言語表現活動

—幼児の「つぶやき」の観察(下)—

Development of the Child's Language (III)

小林 洋文 Hirofumi Kobayashi
山崎ひと美 Hitomi Yamazaki
青木美智子 Michiko Aoki

本研究は、『長野県短期大学紀要』第50号(1995年12月)に発表した「幼児の発達と言語表現活動—幼児の「つぶやき」の観察(上)—」および第53号(中)(1998年12月)の続編である。

はじめに

(上)(中)では、保育現場の実践記録とその考察に基づき、幼児の言語表現に注目してきた。これまでの研究を通して、幼児の言語表現能力の発達が、幼児の成長・発達過程、幼児をとりまく環境、保育者や親(周囲の大人)の在り方などと深く関連し合っているということが見えてきた。

(下)では、再び「つぶやき」の事例を考察しながら、それらをさらに掘り下げてみたいと思う。

はじめに、今回初めて共同研究に参加した青木から見た(上)・(中)の研究に対する保育現場からの感想を述べる。

登場する子は、実際に出会ったことのない子どもたちである。しかし、「言語表現活動の背後にある子どもの置かれている環境も含めて、子どもの成長・発達についても理解を深める」という視点での考察は、青木自身の実践経験とも重なり身近に感じた。その場の状況を思い浮かべながら読み進めると、その背景がかいま見え、子どもたちの言語の発達はもちろん、視野や心の広がり、人間関係や社会性の育ちが伺われ、子どもの見取り方・保育のあり方の勉強になり、こうした研究視点に共感した。

また、掲載されている多くのつぶやきから、子どもたちのありのままの姿が感じられ、保育者の目・耳・心が常に子どもに向かっていると思った。子どもたちの心の言葉・成長を受け留め、日々の保育や子育てを見直すことにもつながるのではないだろうか。

さらに、(中)で現場経験者の素直な感想も含め

てまとめていることから感じるのは、一人の子を多くの教職員で多角的にみる大切であること。また、子どもをどの点からどう見取るのか、そこから何が考えられるかといった視点が必要であるということである。

I. 幼児期以前(乳児期)の発達と言語表現活動

幼稚園という現場で言語表現活動を追ってきた山崎は、1996年1月に女兒、翌1997年7月に男児、さらに3年後、2001年1月に男児を出産し、我が子の発達及び言語表現活動を最も身近なところで把握できることとなり、できるだけすぐその時につぶやきのメモを採るようにしてきた。三人三様ではあるが、発達の道筋は確かに同じであることを感じている。言語活動を中心に、まずは幼児期以前の発達について触れてみることにする。

1. <乳児前期>(出生からおよそ1歳頃まで)

新生児が生まれ出て初めて肺に空気を吸い込んだ時に吐き出す反射的な叫び声を、産声(うぶごえ)という。その後1か月ほどは泣くことによって身体的な不快や欲求を表出するが、単調な泣き声である。

生後1か月を過ぎる頃には、泣き声以外の発声が認められる。1つはクーイング cooing と呼ばれるのどを鳴らすようなかすかな発声であり、もう1つは、「ア」とか「ウ」というような言語音に近い発声の喃語(なんご) babbling である。初期の喃語は乳児が比較的快の状態の時に発せられることが多い。

そして、生後1~2か月を過ぎる頃から、泣き方も音やリズムに変化が現れ始め、力一杯泣き叫ぶだけでなく、普通の声に近い声も出るようになる。これは発声機能が発達したためである。

生後2~3か月を過ぎると、場合によって泣き方が異なってくる。空腹であるとか気持ちが悪いとか甘えたいとか、常に世話をしている大人にもわかる

ようになる。乳児側も始めは不快な反応としての泣き声だが、それに応じて世話をしてもらえ快適になることで、自分の行動が人と通じ合うことを学び、はっきりとした期待を持って泣くようになる。このような交渉は、コミュニケーション能力を育てるとともに、情緒を安定させ、他者に対する信頼感を育てていく。これは愛着行動あるいは母子相互作用と呼ばれ、子どもが健全に発達していくために大事なことと考えられている。

生後4～6か月になると、喃語は非常に盛んになり、「ウーウー」「ウククン」などや「ママ・・・」「ブブブ・・・」などの反復喃語も出てくる。6～7か月頃には、多様な喃語が発声できるようになる。この頃は、首がすわり仰向けだけの世界から、這い這い・おすわりと垂直の世界へと変化し、身体機能の発達が目覚しい時である。

2. <乳児後期> (おおむね1歳半まで)

ほぼ生後半年から寝返りをし、見たものに手を伸ばし(目と手の協応)、玩具を口に持っていくようになる。7～8か月でおすわり・這い這い、9～13か月頃にはつかまり立ちが始まる。

7か月頃から一時期、人見知り・後追いという行動が見られる時期がある。これは、探索活動が活発になるにつれて、自分の安全基地である母親と他の人を識別し、見知らぬ人に警戒し不安を示す行動であり、認知能力の発達や愛着関係の成立を裏付けにして現れるものである。

乳児期前半では、感覚機能を働かせて周りの世界に働きかけ、刺激に反応しながら認知能力を高めたが、乳児期後半では、運動が活発になり、やがて12～18か月には歩行が始まり、はっきりとした意図を持って外界に働きかけて学習していく。

乳児後期の言語は、乳児前期の喃語から進んでいく。乳児が発した喃語(音声表現)に対して、母親や日常的に世話をしている者が反応して、言語的な

意味付けをして片言にしていく。これが言葉でのコミュニケーションの始まりとなる。

例えば、「ママ・・・」と発した乳児の音声を、母親への呼びかけと受け留めて言葉を返す。「ブーブー」と言った視線の先に車を認めながら「ブーブーだね」と言葉を返す。そのように周りの大人の愛情と言葉の援助によって、音声模倣の意欲が高まり、事物を言語記号としてとらえていく。

この積み重ねにより、生後10か月～1歳頃に初めて意味のある言葉「初語」(しょご) first wordを発するようになる。一般的に「ママ」「マンマ」という母親や食べ物を示す言葉が多い。山崎の記録によると、1歳から1歳6か月頃までの我が子の言葉として認識できたのは以下のようなものがある。(おおよそ出現した順に)

<長女>

・ママ ・マンマ ・ワンワン ・くっく(靴) ・ポンポン(お腹) ・パパ ・コッコ(鳥)

<長男>

・ママ ・マンマ ・もしもし(電話) ・パパ ・ワンワン ・ネーネ(お姉ちゃん)

<次男>

・ママ ・バイバイ ・マンマ ・ネーネ ・ワンワン ・パパ

初語は1つの単語であるが、内容的には文章としての役割を果たしており、一語文 one-word sentenceとも呼ばれる。例えば、「ママ」という言葉が「ママ、抱っこして」であったり、「ママはどこにいるの?」であったりする。その場の状況からその子の意図が推察できるのである。

その意図を的確に推察するには、動作 gesture による伝達と指さし行動 pointing がポイントとなる。動作と指さしは言葉と必ず一緒に現れるとは限らないが、自分の興味関心を抱いたものを伝達しようとする意識によるもので、自分の欲求を伝え満たしてもらおうとする意欲も高まっていることが伺える。

また、子ども自身は言葉で表現できなくても、大人が発している言葉を感じ取り、理解する力を身に付けていく。「ダメ」「いいよ」というようなニュアンスもわかったり、「ちょうだい」と言えば、渡すしぐさをし、身近な大人とのコミュニケーションが可能になってくるのである。周囲の心得と働きかけが重要な時期だと思われる。

II. 幼児期の発達と言語表現活動

はじめに

周知のとおり言語 language には3つの機能がある。①伝達・会話、すなわちコミュニケーションの用具としての外言（がいげん）external speech によって言葉を話し、それを聞く。②認知（知る力、情報処理能力）・思考の用具としての内言（ないげん）internal speech によって感覚・知覚・記憶・想像・推理・判断・問題解決する。③自らの行動を他律的・自律的にコントロールする。（ヴィゴツキー『思考と言語』参照）

1. 幼児期前半（1歳半～3歳頃）

幼児期前半（1歳半～3歳頃）、就園前の言語活動について、山崎の子どもの実例を挙げながら、発達と絡めてみていくことにする。

この頃の子どもは、何でも自分でやってみたいが、うまくいかない頃で、親に反抗的な態度をとることがある。しかし、子どもの立場になってみたり、人としての成長過程として考えるとき、それまでの親の完全な庇護の下から外界へ気持ちが向き、探索行動が活発になり、自我が芽生え、自分というものを次第に持つようになる重要な時期であるといえる。

言葉の発達も、一語文から二語文へ、目の前にある具体的なものから自分のイメージしたものを言葉で表すなど、目覚しいものがある。

一語文の頃は、聞く大人の側が、それが叙述なの

か要求なのか、はたまた質問なのかを推察しなければならなかったが、1歳半を過ぎ2歳になる頃には、動詞などの入った二語文が話せるようになり、コミュニケーションがとり易くなる。会話からは、対象物への理解度や、その対象との関係をどのように認知しているのかが伺えるようになる。

また、語彙数が増えることで、多様な言葉を使用するようになる。その一方で構音器官の未成熟や音声認知能力の未発達などで発音の乱れなどもみられる。特にサ行（シ以外）やラ行は、幼児期の終わり頃まで構音しにくい傾向がある。このような幼児音・幼児語 baby talk（注）は、多少なりとも誰もが経験する一時的なものであり、周囲の大人は成熟を待つこと、子どもが積極的に対話しようとする意欲や態度を大切に、その子の発達段階に合わせて対応していくことが望ましい。

（注）幼児語の一例（山崎採集）

- ・音の脱落（言葉の中のある音が脱落している）
 - クーマス（クリスマス）○かーい（かわいい）
 - いただきます（いただきます）
- ・音の置換（他の音と置き換えられて発音する）
 - はまなつ（はなみず）○スピッキ（スキップ）
 - しゃもんらま（シャボン玉）○うもく（動く）
- ・音の転置（単語を構成する音の位置が入れ替わる）
 - ばんかい（乾杯）○くつる（つくる）
 - ばんがる（がんばる）
- ・その他（単語の一部がすでに知っている単語と混乱してしまう）
 - きんだるま（雪だるま）○短ズボン（半ズボン）
 - よいしょさん（おしょうさん）○くさってる（臭くなっている）

2歳を過ぎると要求や質問を積極的にするようになり、感情なども言葉で表すようになってくる。さらに語彙数も増え、話し言葉も二語文から多語文へ複雑になる。また、二語文を使うようになる頃から、

形容詞・助詞などもみられ、3歳頃には会話での意思の疎通がスムーズになる。先に幼児音として発音の乱れについて触れたが、動詞・形容動詞の活用については、幼児期から学童期初期までかなりの混乱があるように思われる(注)。しかし、その用法にはその子なりの規則性があり、周りからの情報を取り入れながら、今までに獲得した限りの言葉を組み立てて、表現しようとする素晴らしい能力をみせてくれる。これこそが、「つぶやき」の「素」である。

(注) 動詞・形容動詞の用法の誤りの例

- ・好きくない(好き+ない) =好きではない
- ・わるる・あらう=笑う・洗う
- ・くつ、はいる=靴を履く
- ・いきた=行った
- ・きない(「来た?」という問いに対し) =来ない
- ・くれる(「来るな」という制止に対し) =行く

ここで、山崎の子(2歳児)の「つぶやき」の具体例を幾つか紹介しておこう。

- ア。(祖父母宅にて)楊枝入れにフォークを立てて「みんな おふろ はいってるー」(長女・2歳4か月)
- イ。(干してあるビニールプールが風にあおられているのを見て)「プールさん こんにちは してる」(長女・2歳6か月)
- ウ。(シャープペンの芯を戻せずに)「これ ぜんぜん おうち かえらないよ」(長女・2歳10か月)
- エ。(ポスターの右上が剥がれてペラペラしているのを見て)「このかみ しょんぼりしてるよ」(長女・2歳11か月)
- オ。(焼き鳥が一本残っていて)「たべてもいい?」(父「ダメだよ。ママの分だから」)「でも やきとり ゆみこ(自分) のほうむいてるよ」(長女・3歳0ヶ月)
- カ。(卵スープにシメジが入っていて)「きのこ おふろ はいってる」(長男・2歳7か月)

キ。(花に水やりの母の側で)「おはな ごはん たべてるの?」(水に当たり花が揺れているのを見て)「おはな さむいって」(長男・2歳8か月)

ク。(散歩中に転んで)「ママー まあちゃん(自分) ひろってよおー」(長男・2歳9か月)

ケ。(三日月を見て)「あ、バナナだ」(次男・2歳5か月)

コ。(母親が横になり眠そうにしていると)「ママ、しっかりして」(次男・2歳10か月)

これらの例は、生まれて2、3年で獲得した知識、限られた言葉だが、意図する意味は的を射ている。目の前の現象を思ったままに表現しており、自分がそのものになり、何にでも心があるかのようなのである(アニミズム)。

また、この頃の子どもの思考の中心には必ず自分がいる(自己中心性 egocentrism)。自分のことはさておき、他者(他物)が他者(他物)に働きかけているという客観的な思考の未熟さも伺える。

2. 幼児期後半(3歳~5歳頃)

3歳になると、ほとんどの子が集団生活に入る。新しい人間関係が広がり、複雑になる中で様々な経験をし、成長する時期である。

前述したように、幼児は自分を中心に考え、他者の立場になって考えることができない。そのため、玩具の取り合い、意見のぶつかり合いは日常茶飯事である。このけんかという小さな争い事は、痛みを知り手加減を知り、相手を理解し、ひいては自分を確立していく大切な経験だといえる。自他を認めながら、共同行動の楽しさを知っていく過程でもある。そのような中でルールができてきて、時には自分を抑えることも必要だと学び、自己をコントロールできる道徳性が養われ、良心が形成されていく。

また、他人の行動を見て、その行為を取り入れて行動するような働きをモデリング modeling というのが、これはその子の行動基準になり、子どもの社会

化を促進する力となる。

その中でも強い憧れを抱く人をモデルにして、その人の態度や行動を取り入れて実行しようとする働きを同一視 identification という。その人のようになりたくて、生き方や考え方を取り入れるようになり、その子の価値観の形成に大きな影響力を持つ。このような点から、よく問題にされるのが、テレビのヒーローものにある暴力シーンなどで、子どもにとって良いのか悪いのか検討を要するものが多過ぎるこの頃である。

さらに幼児期後半になると、運動能力や認知能力の発達に伴い、いろいろなことに挑戦したり、しっかりと自分らしく振舞うことが可能になる。積極的に物事に取り組んで体験を広げ、自発的に行動し自信を持つことができる。大人が過度の要求や干渉をしないで、子どもの意欲や自発性をいかに伸ばすかは重要な課題である。あわせて、充実した遊びや友達との豊かな交流を通し、自制する力や他を思いやる気持ちを育てることを配慮したい。

Ⅲ. 保育現場における言語表現活動

1. 「つぶやき」の事例と考察

ここで、青木が保育現場で書き留めた「つぶやき」のうち、印象に残っているものを、学年を追いながら挙げ、考察する。

ア. 3歳児 S君（4月）

（自分の遊びに夢中で、おやつ時間も外遊びに出ていたS君。入園後しばらくして、遊び込んだ後、保育室に帰ったとき）「ただいま」

年少児に限らず、自分の好きなことを見つけて、遊び込んだことに満足できる毎日であってほしいものだが、S君は、自分が納得するまで遊び続ける姿が見られていた。

この日も、いつものように泥んこになって遊んでいたが、ひと段落したところで、保育室に帰ること

ができた。すでにおやつ時間は始まっていたが、担任の先生を窓越しに見て、「ただいま」と言ったのである。この4月中、私はずっとS君の遊びに付き合っていたが、初めて聞いたその言葉は、担任の先生と保育室を自分の居場所として帰っていったのだろうと思い、S君の大きな一歩だと感じた。

イ. 3歳児 Y子（12月）

（昼食準備のため、グループの友だちと一緒に牛乳のケースを運んでいるとき）「おもたいねえ。でも おおきくなったら Mせんせいみたいに ひとりで もてるようになるんだよ」

グループ活動は時期を見て、日々の生活に取り入れられていく。担任の先生に支えられながら、それぞれ友だちとのコミュニケーションが取れるようになってきたこの時期、友だちと一緒に楽しむことが子どもたちにとって、大きな力になっていくのを感じる。

この日、4人位で牛乳ケースの四方を持ったあるグループで、積極的なY子が掛け声をかけながら一番重たい所を一生懸命持ち運んでいた。Y子にとって担任の先生の存在はこんなにも大きいのかと思った一瞬だった。私たち大人は、子どもたちにとり、憧れであり、手本でもあることを忘れてはならないのだと思った。

ウ. 3歳児 N君（1月）

（自由遊び中、雪に水が染み込んでいく様子を見て）「みずが あるいていくねえ」

寒いといってなかなか外で遊ばない子も多くなるが、雪遊びや氷遊びでこの時期ならではの発見をすることも多い。

この日も、寒い朝だったが、トロッコにたっぷり汲んだ水をこぼして遊ぶうちに、雪に染みていく水の流れに目がとまったN君。色を変えながら水が染みていくのをじっと見つめ、「おもしろい！」と笑顔で私の顔を見たのが印象的だった。

園生活にもすっかり慣れ、コミュニケーションが

取れるようになってきたN君とこのようなひと時を過ごせたことを幸せに感じるとともに、N君の鋭い観察力に驚いた。また、こんなにも小さな変化に目を向けながら遊び込むことができるようになったN君の成長を感じずにはいられなかった。

エ. 4歳児 (5月)

(さつまいもの苗植え…水をあげると、すぐになくなってしまいますので)「(さつまいもの赤ちゃんは)みずを のむんだよね」

動植物にふれるとき、子どもたちに親しみを持ってもらいたい、命があることを感じてほしい、などの願いもあり、動植物に「〇〇さん」と名づけることが多い。この日も、畑に植える苗を「さつまいものあちゃん」と話し、どのように植えるのか、育てるのかをペープサートで紹介したあと、子どもたちと畑に向かった。

「みずをのむ」とは、植えられたばかりの苗をじっと見つめる子どもたちの中から聞こえ、それはとても優しい感じだった。命あるものを慈しむ心が、こうした活動を通して育っていくことを願った私だった。

オ. 4歳児 Y子 (5月)

(さつまいも畑で水をあげていて)「くいしんぼうだなぁ」

苗植えのあと、水を丁寧にあげていたY子。どんなにあげても、吸い込まれるかのようにすぐなくなってしまふ水の様子を見て、こうつぶやいた。

「水を飲みたくてもひとりでは歩いていられない」赤ちゃんたちにご飯をあげる(育てる)ということが、年中児なりに実感されてきたようであった。「くいしんぼう」というその一言に、命を感じて温かい眼差しで見つめるY子の優しさを見た。

カ. 4歳児 K君 (7月)

(七夕のお願い事)「おそらのはしを わたってみたいなぁ」

欲しいものが比較的手に入りやすくなった昨今、

子どもたちの願い事も現実的になったように思う。

K君は、七夕にちなんでのお話や、それを受けての製作活動から「お空の橋を渡りたい」という思いをふくらましていたようだった。「お空に橋はないよ」と、あっさり否定する子が出てくる中、紙芝居や絵本を見終わった後、満足そうな顔をいつもみせるK君だからこそその素敵なこの思いを、大切にしていってほしいと願っている。

キ. 5歳児 M君 (4月)

(登園後しばらくして、「おかあさ～ん」と泣いていたS君に)「おかあさんにあいたくて ないちゃったんだよね。でも もうすぐ おかあさんが おむかえに きてくれるからね。ぼくも ねんしょうさんのとき さみしくてないちゃったから わかるよ」

いつもはS君は園バスで登園するが、この日の朝は母親に送ってもらったためか、離れ際に大泣きをした。保護者から離れての園生活(とくに入園後まもない頃)の気持ちは、複雑なものである。私は、S君の「お母さんと一緒にいたい」という気持ちを受け留めながら、泣きじゃくるS君と門の付近でしばらく過ごし、少し落ち着いてきた頃、一緒に保育室に向かった。

その途中、泣き続けるS君に歩み寄ってのぞき込み、優しく声をかけてくれたM君の姿が、S君の涙を少し止めてくれたように感じた。

また、自分の年少児の頃を思い出して、S君の気持ちに寄り添ってくれたM君の行動と、語りかけるようなその言葉が印象的で、年下に対するなにげない心遣いは、家庭生活とも重なるものがあるのだろう…と思った。

ク. 5歳児 A君 (7月)

(登園バスでの朝の挨拶が元気よくできたことをほめられて)「だって きょうのあさは なっとうごはんだったからね」

不思議なもので、バスコースにもそれぞれクラスカラーならぬ「バスカラー」があるように思う。

A君の乗る園バスは、リードしてくれる年長児が少ない上、各バス停からほぼひとりずつで乗降するためか、乗車後に皆に聞こえる声で挨拶をする子が少ないように感じていた。バスの中もひとつの保育室であると思っている私は、このバス乗務の時はいつも、気持ちよく挨拶できるようになるにはどうしたらよいかと考えていた。

この日、A君は、いきいきとした表情で挨拶することができた。ここぞと思い、そんなA君をみんなの前でほめたところでの一言。Aくんの充実ぶりがかいま見えたのはもちろん、規則正しい生活リズムと朝食の大切さを改めて感じた一瞬でもあった。

ケ. 5歳児 K君(11月)

(りんご狩りの帰り、自分でもいだりんごをかじって)「はちみつが でちゃいそう」

寒くて天候が悪いので、園外保育をとりやめしようか迷った末に短時間でも行こうと決めたりんご狩りの日。

K君をはじめ、自分より高いりんごの木に一生懸命手を伸ばし、これぞというものを選んでみだ貴重なりんごだった。できればその場で食べたかったが、冷たい風雨の中ではということで、園バスの中で一口食べてみることにした。

りんごに蜜があることを知っている子どもたちは、幸せ者だ。(蜜を見て、いたんでいと勘違いする人もいと聞く。)かじりついたりんごにいっぱい蜜にやや興奮ぎみのK君。あの独特の色をはちみつに重ね合わせ、思わず口にした一言。感動のものさしは、言葉の長短ではないと思った。

コ. 5歳児 H君(12月)

(絵本(ありがたいの木)を見た後)「こころがあったかくなるね」

お楽しみ発表会(劇)のきっかけとなればと思いつながら、帰りのHRで読んだ絵本『ありがたいのき』。感想はあえて聞かず、余韻に浸りながら絵本の裏表を見せて閉じてから間もなくの一言。

「心が温かい」そんな言葉を使うようになったんだと感心しながら周りをみると、確かに他の子どもたちの耳にも届いていたようで、肯く子、黙ってその言葉を聞く子、印象に残った場面を思い出す子など、様々だった。心の温かさを感じた子が確かにいることを嬉しく思ったことを、昨日のこのように思い出す。聴き入った集中力もさることながら、お話にどっぷりとつかり、ほんわかとした心持ちになった子どもたちの口から、「発表会はこれにしよう」という声が聞かれるまで、そう時間はかからなかった。

サ. 5歳児 H君

(青木が何か困った顔をしていたとき)「せんせいも こまりすぎると ストレスするでしょ」

一体、どんな顔をしていたのか。何か考え事をしてたのか、仕事上の気になること、あるいはせっぱつまったことがそのときあったのかもしれない。

かつて、昼食中に「みちこせんせい かたまってる」と言われたことがある。楽しいお昼に、「固まってる」顔とは、恥ずかしい限りである。

子どもたちは、本当に、大人の顔を良く見ている。年齢が上がるにつれて、その表情に隠れるその人の思いも、ズバリ見抜く。真剣に話したいとき、悲しい思いを伝えたいときは、正直な顔を見せてきたつもりだが、ふとした時の顔が不安気だったり、困った顔であつたら、子どもたちも一気に沈んだ表情になるだろう。思い悩むことがあったとしても、子どもたちの前ではいつも笑顔で、「元気でいたい」と反省した。それにしても、ストレスなどという言葉が飛び出してくるとは、驚きだった。

シ. 5歳児 H君

(週末に床屋さんで髪を切ってもらい、翌週の登園時)「さぼてんあたまにもらったんだ」

つい、触りたくなくなるすっきりとした髪型は、保育室で私に会うまでの間、至るところで、気付いた友だち・先生に声をかけられたことだろう。

また、私と目があった瞬間に言った「さぼてんあたま」は、H君の笑顔とともに印象深いものだった。この日、H君は「さぼてん」発言で、ちょっとした人気者。日々のこうしたところからも、友だちとの関わりは広がったりする。

保育者として、子どもの前に立って話をする人を客観的に観察した時、表情の豊かな人、視覚的にわかりやすいもので補う人、わかりやすい言葉に置き換えて手短かに話す人、子どもたちの顔を見て話してくれる人は、子どもたちの心をとらえて離さないと私は感じている。その一例を挙げる。

ス. 新幹線の運転所で、運転所の方のお話より（5歳児 2月）

「かぜをひいた（壊れた）時に治（直）したり汚れたらきれいにして 新幹線がいつも元気に走れるように お仕事をしているんだよ」

園外保育や外部の方のお世話になる集会などで、普段なかなか会わない人と関わる時、「どんな人？何を話しているんだろう？」と、子どもたちも興味津津である。（話の途中であきてしまったり、うわの空で聞く子も残念ながらいるのだが。）

子どもたちが興味を持てるような内容で、いかにわかりやすく短い言葉で伝えるかというところで、子どもたちの心をはがっちりつかんでくださった運転所の方の姿勢は、いまだに忘れられずにいる。

以上「つぶやき」の例を幾つか紹介してきたが、「つぶやき」とは、何かを譬えたり、創造的なものと勝手な見方をしていた時期もあった。しかし、子どもと深く関わっていくうちに、子どもは、その時その場で感じたことをありのままに表現している（つぶやいている）のだと感じるようになった。それはまた、その子の感性が影響するものではあるが、日々様々な経験をし、成長していく子どもだからこそ、保育者や友だち・家族と交わす会話の中でごく

自然に生まれてくるものだと今は思うようになった。その子の関心や心を揺らす出来事、成長、取り巻く環境などが伺われるのも当然である。

大人はとかく物事を筋道立てて立派に考えようとし、かえって複雑にしがちだが、子どもは簡潔で自分の知る限りの言葉で的確に表現している。子どものつぶやきは、その場の空気や生きる力を私に感じさせてくれた。生きていることが嬉しい時、また、本気になって子どもを知ろうとする時、子どもの言葉は皆、新鮮に映って見えたものである。そんな気持ちを持てこれからも大切にしていきたい。

2. 幼稚園における言語活動と環境のあり方

幼稚園教育要領第2章「ねらい及び内容」の領域「言葉」の前文には、「経験したことなどを自分なりの言葉で表現し、相手の話す言葉を聞こうとする意欲や態度を育て、言葉に対する感覚や言葉で表現する力を養う」とある。幼児の遊びが活発になり人間関係が広く深くなっていくと、言葉も活発になってくる。また、言葉によって子ども自身の世界も拡大されていく。幼児期後半は、生活の言葉化、言葉の生活化の時期だといえる。保育者は、幼児と言葉を交わす相手であり、言葉の環境を作り出す担い手である。環境そのものと言っても過言ではなく、極めて重要な役割を果たしている。

幼稚園には、担任以外の保育者もいるし同世代の子どももたくさんいる。様々な人から話しかけられ対応していくことは、生きた言葉の学習である。このような「人との出会い」はもちろんのこと、誕生会などの行事や「今日はお絵描きをした」などの日々の出来事も言語活動の重要な環境である。

また、幼児が体験したことを保育者や友だちとたくさんおしゃべりをする中で、時と場と人に応じた話し方を学んだり、「もし～なら～だ」というような仮定的な文脈も理解していくようになる。

そして、様々な遊びとその仲間がいれば言葉が介

在する。さらに、しりとりや絵本・紙芝居などの児童文学は、言語表現活動をより豊かにしていく。

以上のように、豊かな環境こそ豊かな言語表現活動につながるのだが、あらゆる環境（特に自然）に子ども自ら積極的に関わり、五感を使った体験活動をする機会を保障したいものである。

3. 保育者の役割と援助

幼児の言語活動で保育者の役割と援助が重要であることは既に触れたが、この点で具体的には保育者に何が求められているのだろうか。

共に生活し、目をかけ手をかけ心を配ってくれる保育者に幼児は心を開き、大好きになっていく。母親や家族以外に心を許すことが社会生活に入っていく第一歩である。まず基本は、この信頼関係を築くことである。

次に、あらゆる経験と感動を共有することである。心の拠り所となる人と心が通じ合う喜びを感じると、子どもは（大人も）自分のことを伝えようとする気になる。保育者は良き聞き手であり、ときに共に考え、語り合いたい。対応をするとき、保育者は視線・動作・表情・声の調子などに気をつけ、より幼児が自ら話したくなるような雰囲気を感じたい。

また、幼児に対する言葉も否定的・命令的・禁止的ではなく、肯定的に使いたい。時には叱らなくてはならない場面もあるが、他の幼児の前では控えたい。その他、不必要な競争をさせず、協力や共同活動を多く取り入れ、幼児自身が興味・関心を持った活動を尊重すること、無口な子がリラックスして話せるような雰囲気をつくることなども留意すべき点である。

絵本・紙芝居・童話などは、好ましい文化財を選び、読み聞かせる機会を多くする。そして魅力的に演じる役者でもありたい。

保育環境を整え、幼児に直接接し、又あるときには間接的に対応し、その子に対する理解や発達に関

する知識が必要など、保育者に要求される力量は多大なものである。その中で言葉とは、生活の中で当たり前に使われるものであり、殊更に研修などに取り上げられることは少ないと思われる。しかし、時には言葉に関する研修を取り入れたり、保育の中で言語活動での問題点はないかをお互いに振り返りながら、園全体で話し合う質の高い保育者集団でありたい。

子どもの前に立つときに、青木が課題としていた具体的な配慮の一部を挙げる。

- ・黒板の板書や記名…目に触れる機会が多いので、子どもたちが文字に興味を持った時に真似をしてもいいものをというつもりで、見やすい大きさに丁寧に書く。
- ・言葉の使い方…語尾まで丁寧に。ゆっくり、はっきり、わかりやすく。豊かな表情で目を見て話しかける。表現の仕方が複数あるときは、学年に応じて言葉の意味を補足する。
- ・丁寧な「お」の乱用に気をつける。（特に年長になるにつれて。）
- ・「でかい」「やばい」などは正しい日本語で。
- ・言葉の言い換え…大人にとっては使い慣れた言葉でも、子どもたちには難しく理解できない段階のものもある。子どもたちの心情に沿った、わかりやすい言葉に置き換えることで、保育者の意図が伝わりやすく、内容に親しみが持てる。
- ・日常の会話や読み聞かせ…保育者の気持ちやお話の臨場感が伝わるよう、表情とともに声色を変え、声にも表情が出るように意識した。（言葉には感情があることを伝えるように。）
- ・生活の中の言葉に遊びを取り入れる…リズムのある言葉（歌や手遊び）は、体を使うことで楽しみながら身につけていく（朝・昼食時・帰りの挨拶など）。言葉だけで説明しようとせず、楽しむ気持ちで。また、視覚的な教材（絵やペーパーサートなど）と一緒に伝えると、子どもたちは目と耳か

らその内容を知ることができる。

- ・集会時…年少児が理解できる言葉・内容を基準に話す。始まる前の手遊びは、遊びながら落ち着くもの、集中できるものを取り入れる。徐々にゆっくりしたペース、小さな声にしていく。(はじまるよ／いっぱいといっぱいでどんなおと／きゃべつ畑／アンパンマン／グー・チョキ・パーで／など)前に立つ保育者が静かにじっと待つことも、時には大切である。

4. 保育現場における言語活動上の留意点

以下、問題提起のつもりで、保育現場における言語活動上の留意点として6点挙げておきたい。

(1) 一斉挨拶・決まり文句などの唱え言葉

挨拶は決まり文句である。しかし形だけのものではなく、相手の存在を尊重しいたわる心の表現である。

3、4歳までは、とかく挨拶が形式的になりやすいが、様々な挨拶言葉を使う場面に出会い、言葉と状況の対応を経験することによって、徐々に挨拶の背景にある心の動きも会得していく。言葉の学習であると共に心の学習である。

保育の中で一斉に唱えるような形の挨拶・決まり文句(例えば、「おててをパッチン」「おててはおひざ」「てをあわせましょう」など)は、きちんと揃えるためには必要ではあるが、生活の中で時と場合による多様な挨拶を心を込めてしていきたいものである。

(2) 集中させるための手遊び

手遊びは、入園当初は幼児自身がこれから静かに話を聞くときだということがわかり効果的だが、園生活に慣れてきたら、保育者が話し始めたら話を自ら聞こうとしたり、おしゃべりは人の迷惑になることを気付かせていきたい。

(3) 話し合い

話し合いとは、自分の考えを頭の中で整理し、

適切な言葉で仲間にはわかるように話す、意見の違いを調整する、決まったことに従うなど、幼児には高度な要求である。保育者が立ち合って、幼児がきちんと理解できる簡単な話し合いから経験を積ませたい。

(4) 決まり・約束・ルール

時に「ピアノの音楽が終わるまでにお片付けしよう」との合図で片付ける場面があり得る。しかしこれは、幼児の自主性によるものではない。次の活動のためにするのだと説明をし、一緒に片付ける方が望ましいと思われる。

また、このボールは屋外用、これは室内用、ここは穴を掘ってもいい所、ここは禁止など、園の実態によって細かい規制・制限があるが、幼児の遊びにはできるだけ制約がない方がいい。幼児が理解できるような約束にすべきである。

(5) 保育者自身の言葉

同じパターンの言葉がけや受け応え・励ましでは、幼児の心に響いてはいかない。保育者自身の感性を磨き、幼児に共感しながら、生き生きとした言語表現活動を心がけたい。また、保育者自身、子どもの声をしっかり受け留め、聞く姿勢と耳を常に持っていたい。

(6) 文字指導

4～5歳になると、文字に興味を持ち、保育室内の掲示物などの文字に関心を寄せたり、絵本の字を拾い読みしたりするようになる。中には書き始める子もいる。

(幼児期における文字に関する見解や取り組みは、価値観の分かれるところである。

①「幼児期から文字を教えることは有害である」という意見。②「最低ひらがな位は教えるべきである」という意見。③「その子が興味を示したら教える」という意見などがある。)

いずれにしても、その子の心身の発達状況・興味・

関心の方向・実態などに合わせたものでないといけないことは心しておきたい。

しりとりなどの言葉遊びから入って、文字感覚に興味を持つようになってから、追々文字につながるよう考えたい。文字の指導も「教える」というより、やはり幼児の場合、遊びの中で文字に関わる経験を継続的にしていくことが良いと思われる。また、文字を読むとは、言葉を読み取るのであり、話し言葉の基礎がしっかりしていることが必要である。

5. 現代の社会環境と幼児の言葉の発達

人間にとって大切な事柄は、言葉だけで理解できるとは限らない。野山や林や海や川に親しませること、町の様子や家庭生活に必要なものに良くなじませること、昆虫や動物・草花に触れること、経験を通じて物事の性質を理解すること、…このような経験が果たして保障されているだろうか。今や、保育者や周りの大人が、かなり意識して子どもに経験させる機会を作らねばならない。

言葉に関する環境に目を向けると、テレビなどマスメディアの問題は発生してからかなりたち、問題意識が麻痺し始めている。さらに、大人にとっては便利であったり娯楽であったりする携帯電話・インターネット・ゲーム機器等が子どもに及ぼす影響は大きい。

今回、小学校以降について論ずるには至らなかったが、昨今、「普通の子」と言われる子が、意思の疎通を図ることができずに咄嗟にかつとなり、身体まで傷をつけてしまう事件がおきている。さらに、現代社会の新しい問題であるネットコミュニケーションは「言葉」のみに偏った世界である。しぐさ・表情・声の調子など言語以外で伝わる部分（ノンバーバル・コミュニケーション）が欠落している。相手が見えないゆえに、面と向かっては言えない言葉をぶつける。大人にとっては日常を乖離するための刺激に過ぎないものも、子どもにとっては、現実の自分

や世界を変えてしまうような効果を持っている。

現実とは、自分と違う価値観を持つ周りの人と、時には傷つけ合いながらも折り合いをつけ、お互いを認め合いながら生活していくことである。子ども時代には、生身の人間同士のコミュニケーションという本来大切にされるべきものが、最も重要なものとして考えられなければならない。

また、騒音・雑音が多過ぎないだろうか。話の妨げと共に心をいらいらさせ、注意散漫な態度を作っていくことになってしまう。さらに、大人自身の言葉の乱れもはなはだしい。話し言葉は本来、連帯が拡大していくように働く。しかし現代は、自己の属するグループと他のグループを区別し、これを排除し、それとの断絶を助長するように働きかねない。狭い人間関係の中での言葉は、形式が崩れ使用法もルーズになり、向上・改良の機会が持てない。

決して望ましいとは思われない現代の言語環境の中で、子どもの言葉の獲得期に直接関わる大人は注意しなければならない。

IV. 研究のまとめと今後の課題

「つぶやき」とは

私たちの共同研究（上・中・下）では、言語の発達途上にある子ども特有の素晴らしい言語表現活動を「つぶやき」と言い表してきたが、K. チュコフスキーは「子どもは人から聞いたことを正しく反復しているものと思ひ込み、自分が新しい言葉を創っていることに気付いていない。こうした無意識的な言葉の想像は、この時期の驚くべき現象の一つなのである。…2歳以後しばらくは天才的な言語学者となり、5～6歳に近づくにしたがってこの才能を失っていく。言語習得過程が完成するため、その必要性がなくなる。」と述べ、つぶやきのことを「自己流の言葉」「即興語」と称している。

さらに彼は、「言葉の意味と構造に対する子ども

の知覚は大人よりはるかに鋭い。子どもの間違え（大人からみれば）は世界についての断片的知識に、見せかけの秩序なりとも与えようとする子どもの精神の粘り強い努力であり、驚かざるをえない。できるだけ早く外界を理解したいという、疲れを知らぬ子どもの頭脳のやむにやまれぬ要求だ」と語っている（チュコフスキー『2歳から5歳まで』1976年、樹下節訳、理論社）。

「言語の発達」とは、言葉を獲得し、言葉の機能を使い情報を処理し、高度な思考を可能にしていくことである。一方、「つぶやき」とは、幼児期のごく限られた期間に表出される幼児のみが持つ能力である。この素晴らしい能力は言葉の発達と共に失われていく運命にある（チュコフスキー）。例えば、幼児の描く絵は、バランスは悪いがそれ故個性的であり魅力的である。しかし、大人と同じような認識や概念ができてくると、やはり画一化されていくのである。

しかし願わくは、私たちも大人になっても個性的で詩的な表現ができる（いやそままでいかになくとも、理解できる）感性を持ち合わせたい。特に幼児に直に接する保育者には、今そのことが求められているように思われる。

子どもたちは日々、言葉のシャワーに浸っている。言葉を耳にするだけでなく、自らの体験を重ねながら、その言葉のもつ意味を少しずつ知り、自分で言葉を選び、使い分けていくようになる。子どもは成長するにつれて、自分の思いを言葉にする…人の話を最後まで聞く…語尾まで話す…相手の気持ちに気付く。子どもの言葉に対する大人の願いもまた徐々に高度なものになっていく。そうした一連の流れの中にあって、「つぶやき」は、その長短に関わらず、心に刻まれたものを自分の力で表現した言葉であり、その子の感動、心が動いた一瞬であるとともに成長の瞬間である。その段階を共に感じられる喜びは幸せである。

ここ10年ほど前から、子どもに「生きる力」をつけよう、心の時代だと言われているが、裏を返せばそれは、子どもが健やかに育つ環境が失われていく方向にあるということである。生きた自然の中で、伸び伸びと五感を使った実体験を豊かにさせてやりたいものである。

*

今後の課題

私たちの研究は、「保育の現場にいて子どものつぶやきを耳にすると、ふと心が和み、感動したり、考えさせられたりする。それは輝く一瞬である。」という感慨から始まった。

保育の現場は、子どもの言葉を聞けるだけでも楽しい貴重な所である。よく観察していくと、その子のものの考え方や心情・認識能力など、それまでのその子の育ちや成長した姿が見えてくる所でもあることがわかった。

さらに、幼児の発達（とりわけ言語）と絡めて研究を進める中で、子どもの言語の獲得過程は大人から直接模倣するだけでなく、目の前の事象をそのとき持っている能力の自分流の思考回路（枠組み）のフィルターを通した上で獲得しつつ表現している過程であることもわかってきた。

ピアジェは、子どもは子どもなりに科学的な筋の通る思考をしているはずだと考え、目の前にいる子どもを観察する中で幼児の研究を進めたが、やはり幼児教育に携わる大人（保育者・研究者・親など）は、ピアジェ同様、目の前の子どもから学ぼうとする姿勢を忘れてはならない。

子どもには「子どもなりの思考回路」があると思われるが、これは、すべての子どもがその各発達段階で同じように持ち合わせるのか、それとも個人による違いがあるのか、という疑問が残る。この解明にはかなりの量のデータと細かい分析が必要になる。

言語の発達は、発達心理学の重要な一部分を占めており、日本でも1920年代頃から前言語期の乳児

の認識能力と表現活動などについて（例えば、初語の発生はいつ頃か、どんな語かとか、名詞・動詞などの各品詞はいつ頃どんな言葉で発せられるのかという課題など）の研究が進められてきている。より一層、言語発達の普遍性を明らかにしつつ、同時に日本という風土特有の言語発達の仕方を探っていくことも今後の研究課題だろう。

*

研究を終えて

保育に携わっていた8年間（青木1996-2004年）・9年間（山崎1986-1995）は、保育者として子どもたちに育ててもらったと、しみじみ思う。子どもから教えてもらった大きなものは、ものの見方・考え方と「表現」ということである。子どものありのままの姿・見方・考え方をじっくりみて、保育に取り入れ、自分自身も遊びや活動・表現を楽しむことで、さらに子どもに合った活動になるのではないかと考えた。

「表現」というととかく、絵画や製作活動の結果としての「作品」ととらえられがちだったが、どのようにして創られていくのか、その過程も表現の重要な一部だと学んだ時期があった。その場の子どもの姿だけでなく、そこに至った過程に何があり、誰とどのような関わりがあり、またどう感じてきたのかなど、点を線にしてみることで、その子の成長はもちろん、その後の保育の課題を見出すきっかけになる。そんな意識で日々の子どもの姿を見取っていく大切さを教わった。

「言葉」もまた表現である。言葉を通してそのものの見方・考え方（傾向）・思い・成長の跡など様々なものが見え、それはまた、声にならない言葉・表情・しぐさを含め、子どもそれぞれに違う。それらを日々受け留め認めていくことが、その子を知る手がかりとなり、保育の道筋になっていくと思う。その時々の子どもの言葉・しぐさ・表情などがどれも、その子の表現つまりは成長の一部である。

その一つひとつを見逃さないで、できる限りきちんと受け留めたいものである。

（付記）

本研究に協力いただいた方々に感謝するとともに、保育者や子育てに関わる全ての皆さんにエールを送り、筆を置くことにする。

（下）に関連する参考文献

- 1) 小林芳郎 荻原はるみ『乳・幼児の発達心理学』保育出版社、1996
- 2) 高杉自子 柴崎正行 戸田雅美『保育内容「言葉」』（新・保育講座10）ミネルヴァ書房、2001
- 3) 『保育サポート』（財）女性労働協会、2002
- 4) 村上孝次『子どものことばと教育』金子書房、1983
- 5) 村上孝次『日本の言語発達研究』培風館、1884
- 6) K. チュコフスキー 樹下節：訳『2歳から5歳まで』理論社、1976
- 7) 岡本夏木『子どもことば』岩波新書、1982
- 8) 岡本夏木『ことばと発達』岩波新書、1985
- 9) ヴィゴツキー 柴田義松：訳『思考と言語』明治書院、1967
- 10) 白石正久『発達の扉・上』かもがわ出版、1994
- 11) 白石正久『発達の扉・下』かもがわ出版、1996